

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	チャレンジハウスHERO		
○保護者評価実施期間	R8年 1月 28日		～ R8年 2月 14日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	10名	(回答者数) 5名
○従業者評価実施期間	R8年 1月 28日		～ R8年 2月 14日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5名	(回答者数) 4名
○事業者向け自己評価表作成日	R8年 2月 20日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	遊びを通じて基本的な生活習慣や、お友達との関わりの基礎を楽しみながら身につけられる環境	外出イベントでは事前に子どもの意見を取り入れたり、室内では静と動のスペースを明確に分けたりすることで、集団が苦手な子どもも自分のペースで楽しめる環境を常に意識している	活動を通じて得られた成功体験(できた!という喜び)をスモールステップで積み上げ、自己肯定感を高める支援をより強化していく
2	各々のニーズに合わせたプログラムの作成、療育を通して個々の成長をより促し、将来に繋がる経験を重ねていること。	個別支援計画に沿ったSSTに加え、運動やコミュニケーションなど各々の苦手とする部分に着目し、個別支援を進め子どもたちの出来る事を日々増やしている	子どもたちのできたを逐一保護者様と共有し、新たな達成目標を設けたり、スモールステップで進んでいけるよう本児とも話し合いながら無理なく進めていく
3	季節毎の行事、プログラムの実施から様々な体験が出来る機会がある	お花見や夏祭り、ハロウィンやクリスマスパーティーなど四季折々の行事、また、伝統文化に触れることができるような季節行事の取り組みを行っている	それぞれの行事の意味や文化の背景について、子どもたちが楽しみながら理解を深められるような時間を増やしていく

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	個々の発達成育の差が大きいため、集団活動の中で一人ひとりに合わせた微細な環境設定をさらに徹底すること	同じ活動の繰り返しは安心感を生む一方で、意欲の低下を招くこともある。年齢層の幅が広いため、全員の興味を同時に惹きつける難易度の高い設定が必要になっている	スタッフ間で定期的な企画会議を行い、トレンドや新しい療育ツールを積極的に導入。子どもの反応を即座にフィードバックし、翌週の活動に反映させるなど、プログラムの柔軟なアップデート体制を構築する
2	記録書類等の事務作業の効率化	デジタルに不慣れなスタッフの負担、もっと子ども達との関わる時間が欲しい、優先したいという思い	業務分担の見直し、デジタル導入前に丁寧なレクチャーを行い慣れるまで紙媒体の併用。記録も大切な支援の一つとして意味づけや評価を共有しスタッフの育成をする
3	フロアタイルの経年劣化による床面の傷み	長年の使用による摩耗や剥がれがあり、子どもたちが裸足で活動したり、転倒したりした際の安全面や衛生面での懸念があった	劣化した箇所を中心にクッションマットを敷くなどの対応を実施。安全性の確保だけでなく、防音性や足腰への負担軽減も考慮し、より安心して過ごせる環境を整えた